

## 文化化と文明化—トリュフォー監督主演「野性の少年」を観て

### 1.

念願の映画「野性の少年」(原題: The wild boy) の DVD を入手することができた。

この映画については、かつてわが教育界でも大きな話題となったことがある。大衆的オピニオンの風潮の時にはそっぽを向いてしまうという性分が災いして、教育界での議論の輪に加わることはなかった。しかし、1年半ほど前のこと(2005年)、この映画の主人公として描かれている「イタール博士」(ジャン=マルク=ガスパル・イタール)の業績に関する研究調査を進めることを決意したころの日、障害児者教育史研究の大先達である清水寛先生から、この映画について詳細な内容紹介を受けることができた。そして、イタルの教育者としての偉大さと人間が発達するというまさに神秘的なメカニズムをこの映画から学ぶことができるし、研究をそこから出発させるべきだ、とのご指導をいただいた。それ以来、ぼくは、この映画を観ることの憧憬を強めていたわけである。

映画鑑賞の前に、ぼくはぼくなり「野性の少年」という主題を纏めておきたい、そのことが映画鑑賞を単なる受け身にさせるのではなく、ぼくの中にある、それこそこだわりとなり続けている「教育における近代とは何か」をより鮮明にさせることになるだろうという期待を込めて、今夏、「ヴィクトール ふたり」という小品をまとめた<sup>1</sup>。

さて、トリュフォー監督映画「野性の少年」は「史実そのもの」であるのか。映画に登場する主要なキャラクターはすべて実在した。ぼくがとくに印象づけられたのはアヴェロン県からパリに「野性の少年」後の「ヴィクトール」を移送する任を負った老人である。出世とは無関係で人間愛に満ちフランスの片田舎で地道な学者として生きている博物学教授ボナテルが見事に演じられていた。これこそ史実そのものであろう。

その一方で、パリというヨーロッパ文化文明の中心地で「内科部長」としてすでに一定の地位を得ている「イタール博士」および彼を巡る人脈の描き方は必ずしも史実に忠実ではない。イタールが「野性の少年」の教育を手がけはじめた時は「外科」分野に所属し(「第3 外科医」という「低い身分」であった)、なおかつ学位(博士号)も有していない。パリ聾啞学校の学校医(無資格医師)は兼務であり、さらにパリ医学校に在籍している学生でもあった。映画からは、当時25歳という「明日をどん欲に求める青年像」は窺うことができなかった。また、「イタール博士」の教育実験につねに寄り添っていた「ゲラン婦人」は「家政婦」という立場で描かれている。史実は150フランという年俸を得て(映画では「慰労金150フラン」とされている)「野性の少年の管理・監督」の任に当たっている。もちろん

---

<sup>1</sup> この小品をもとに拙著『知的障害教育の開拓者セガン—孤立から社会化へ』(新日本出版社、2010年)の序章が綴られた。

ん当時のフランス社会の男性の地位と女性の地位とは後者が前者に従属するというものであったから、「家政婦」という位置づけとして描くことは大きな誤りであるわけではないのだろう。

しかし、「野性の少年」の教育・訓練の場が「パリ郊外パテニヨルのイタール博士の自宅」とされたのは史実に反することである。自宅であるという意味は「イタール博士」と「家政婦」の兩人によって24時間の教育・訓練が可能であるということになる。しかし、史実はパリ聾啞学校が教育・訓練の場であり、ゲラン婦人は24時間「ヴィクトール」の「管理・監督」を行っていたのに対し、イタールは、聾啞学校近在のアパートマンに居住し、陸軍病院（第3外科医）勤務（午前中）、パリ聾啞学校医勤務（午後）、そしてパリ医学校学生として博士論文執筆（午後の勤務の間）という日常生活の中で、ヴィクトールに対する教育・訓練を行っていたのである。ぼくなどから見れば、この超人的なエネルギー、パッションこそが教育史上の奇跡を起こさせたのだろう、ということになる<sup>2</sup>。

このように場面設定・人物設定の虚実を見ていけば、「実際にあった話をもとにしてトリュフォーが創作した」と言うべきであろう。そしてそのことは何らとがめられることではない。デフォルメという手法により、「実際にあった話」の「主題」を現代に再生させたという現代文明に対する問題提起の功績は大きなものがある。

映画はおよそ1時間半。この短い時間で、何をこそ「主題」とし、どう描くか。

「主題」の一つは「人間が人間であることは何か」であり、あと一つは「人間が人間となり行くための他の人間による関わり＝教育とは何か」ということである。きわめて幼少期に親によって生存を抹殺させるために捨てられた一人の子どもが他の人間の手を借りることなく自力で約10年間生き抜いてきた。このこと自体、ぼくなどは、生命力の驚異を覚えるのだが、それはともかく、この子どもは生物種のヒトではあるけれども人ではない。人である証の最低条件は、「近代」以来、2足直立歩行、道具使用（手の使用）、「ことば」の使用（コミュニケーション）であるとされてきた。「野性の少年」は、アヴェロンの森の中で捕縛されパリ聾啞学校で観察が開始されるまでは、それらの人である証を見せることがなかった。しかし、「イタール博士」による教育・訓練が開始されると共に、ヒトが人になっていく。直立歩行へと矯正されるシーン、「ヴィクトール」と名付けられるシーン、牛

---

<sup>2</sup> イタールが「野性の少年」に対する教育実験に取り組み始めたのが1801年の始めである。上記したイタールの「属性」はこの当時のもの。映画「野性の少年」の原作は1806年にイタールが内務大臣に提出した報告書に拠っている。この頃にはイタールは「医学博士」となっており、陸軍病院の職務からは退いている。国立聾啞学校の勤務医であり、かつパリ市内に個人病院を開いていた。

イタールが「野性の少年」すなわち「ヴィクトール」に対する教育実験を行った期間は延べ4年間に及んだと考えられる。

乳を「レ」と言うことができるようになるシーン、さらに発展的な実物対応から抽象物対応への認識の変化のシーンなどはよく知られている。その他にも、道具・手の使用に関しては、スプーンを使ってスープを飲むことに始まり、鋸を使って木を切る、さらに高度な発達として木を加工してチョークばさみを作るなどがある。

ぼくが強く印象づけられたのは、「イタール博士」と「ピネル博士」による初期観察の際に、鏡に映る対象物を鏡の後ろに探すことをしばらく展開し最後に自分の後ろに実在する対象物を認識するシーンである。鏡に映ったのが彼のこれまでの森の生活での食料を象徴するかの如き果物（リンゴ）。それを得ようと試行錯誤し、最終的に食料にありつくことができた。これは、この映画の「主題」を鑑賞者に予期させる導入場面の一つとなっている。「ピネル博士」をして「動物以下」と言わしめた<sup>3</sup>「野性の少年」は、教育・訓練を受ける前から、じつは人であるからこそ可能な推論認識ができるのである。この「人である」ことが、文明論的に言えばヒトでしかない者を人に仕上げていく原点なのである。

関連する印象的なシーンは、羅列的であるが、ローソクの明かりを怖がっていたのがやがて火に目を近づけ息を吹きかけるシーン（これは「イタール博士」による発音訓練とも関係する）、入浴シーンである。そして、発話訓練でイタールが自分ののどに「ヴィクトール」の手を当てさせ音の響きを獲得させているシーンなどは、その前史として聾啞者の発話教育を開拓したペレールの感覚主義教育を思い起こさせたし、さらにははるか後年のヘレン・ケラーの教育・学習体験をも想起することができたのである。などなど。

以上は「ヒトが人になる」プロセスを描く「主題」であるのに対し、「ヴィクトール」が聾者であるのかないのかは、じつに大きく、重い「人間性」の発達課題への「主題」設定であろう。史実はどうであったのか。聾者ではないとされたのが大勢である。では聾者ではないとはどういうことなのか。映画「野性の少年」は「音」がモチーフであると言っても過言ではない。それを幾つかのシーンで見よう。

\* 猟師によって追われ、捕縛され、パリに移送されるまで。

○ 遠くで猟犬の吠える声がある。少年がその声の方に目をやり森の中を逃げる。

● 捕縛されて移送するまで声一つ挙げない。新聞で聾啞と報じられる。

---

<sup>3</sup> 「ピネル博士」は「野性の少年」を白痴<sup>イディオット</sup>だと診断した。白痴者を「動物的人間」と形容する精神医学者もいるほどに、「ヒトが人になる」可能性はほとんど認められていなかった時代である。「動物以下」という形容にはこのような意味が含まれている。トリュフォーが「野性の少年」すなわち「ヴィクトール」を白痴者と理解してこの鏡のシーンを演出したのだろうか、それとも白痴ではなくあくまでも文明社会から隔絶されて育ってきた知的遅滞者だと理解してこのシーンを演出したのだろうか。このあたりは映画鑑賞者の自主的な判断に委ねられているように思うが、やや先走った物言いになるが、映画全体を貫いているトリュフォーの人間理解は、「人は限りなく発達し続ける」というところにある。たとえその人が知的障害を持っていても持っているまいが関わらず。

\*パリ聾啞学校での観察時。

●書記が文具を落とす音（無為）、背中越しにドアを閉める音（有為）にまったく反応しない。

○「誰かがクルミを割った音に反応した」とのボナテールの報告。

\*「イタル博士」の自宅での光景。

●イタル博士がゲラン婦人に「ことばは理解しないが、なるべく声を掛けてやってほしい」

○食事の場面。ゲラン婦人の声のみ。「口を開けて」「そうよ」「上手よ」。「イタル博士」の驚きの表情。

\*「水」や「ミルク」、「外出」の要求

○コップをコツコツと打ち付ける。ドアやノブを叩く、ガチャガチャとさせる。

\*知的訓練の際。

○外の鳥の鳴き声に気を盗られ学習に集中しない。

\*そして、メインの「音」はO音に敏感であることだ。そのことによって「野性の少年」は「ヴィクトール」という名前が授けられる。

以上は「音」を「聞き分ける」能力である。「聞こえる」「聞こえない」という基準が生理的機能である時代に、「動物以下だ」と「<sup>ワイルド・ボーイ</sup>未開」の子どもが、一定の音を「聞き分ける」。今日でも聴覚検査は生理的機能が主体であり、「聞き分ける」というのは、かなり高度な意識的行動であり、個性的であるので数値化することは困難である。しかし、ぼくたちが生活体として生きている現実の外音すべてを聞いては自我を保ち得ない。「聞こえているけれど聞かない、あるいは聞こえない」からこそ、精神を保つことができるのである。このことの意味を、映画では、ボナテールがまずつかみ、「ゲラン婦人」が共同生活の中で気付いた。「聞き分ける」というのは、社会性の能力である。自己を保ち、自他を繋ぎ、やがて規範意識や実践性へと発展していく。「ヴィクトール」は野生生活の中で「自己を保つ」ためにこそ「聞き分け」の能力を自力で発達させていた。彼がなぜO音に敏感であったのか、そのことが解明されていれば、「聞き分け」の意味を鑑賞者に訴えることができたであろうと思う。もっともこの現象的史実の意味するところはイタルの教育実験報告でも明らかにはされていないのだが。

ついでのことながら補足しておく、社会の支配的文明にとって「聞き分ける」にふさわしい内容を「聞き分ける」ことができるようにと幼少時から教育・訓練することをぼくは「文明化」と呼び、そういう社会の中で自身にとって一生命を保ち生活を進める主体に

とって一意味ある内容を「聞き分ける」ことができるように教育・訓練することを「文化化」と呼んでいる。そして「近代教育」の主流は「文明化」にあり、「文化化」は、時と場合によっては、抑圧され抹殺されさえした。トリュフォーは「文明化」を目指したのか「文化化」を目指したのか。どちらなのだろう。

このことはエンディングをどのような視点で見るのかに関わってこよう。

「普通の子どもより長時間、厳しい」教育・訓練によって、「ヴィクトール」は、しばしば癲癇を起こす。突然床に倒れ込み、バタバタと身体を激しく動かす。一種のけいれんのようにも見える。それが生得的脳障害による発作を象徴しているのか（「癲癇」）、厳しい教育・訓練に対する精一杯の抵抗なのか（「ゲラン婦人」は後者の立場を取り、「イタール博士」に進言している）、トリュフォーは恐らく後者の立場を取ることによって、現代の子育て・教育に対する異議申し立てを象徴的に表現したのであろう。いずれにしても、このような日常性が、ぷつんと切られる時が描かれる。それは、「ヴィクトール」が野に帰ってしまうのである。昔日の「野性の少年」が描かれたあと、「ヴィクトール」は「イタール博士」と「ゲラン婦人」が待つ館—文明社会の象徴—に戻る。

野に帰ったのになぜ「イタール博士」たちの所に戻ったのだろうか。「イタール博士」は「ヴィクトールは戻ってこないだろう」と呟く。それは彼の教育訓練の「敗北」を意識したものであったのだろうか。一方、「ヴィクトール」は、野に遊び、両手で川面を打ち、民家に忍び込み「鶏泥棒」を企てるなど、「野生」に返った。しかし、彼は木登りに失敗してしまう。このシーンこそ、「野性の少年」が「ヴィクトール」になったことを象徴しているのだ。昔のままの「野性の少年」ではなく、つまり、自らの生命を守り生活の必要を満たすだけに明け暮れた生き方を持つ人ではなく、自らと他者、そして社会とを結ぶ必要を満たす生き方を求める人となっていたのである。

トリュフォーは、果たして、「イタール博士」と「ゲラン婦人」に、現代の何を象徴させようとしたのだろうか。ぼくなり捉え方で言えば、「イタール博士」には「文明化」を、「ゲラン婦人」には「文化化」を、そしてその両者の共生共存（つまり教育訓練）の中で「ヒトは人になりゆく」ことを主張したのであろう。エンディングに思わず涙したぼくの内面の実情は、このようなところにあっただと思うのである。

最後に「文化化」と「文明化」との関係について、「野性の少年」に即して、述べておきたい。きわめて象徴的なシーンがある。一つは「野性の少年」に靴を履かせる場面、あと一つは「野性の少年」がズボンから自らの意志で着用する場面である。前者は、「野性の少年」にとって、彼自身の意志も欲求もなく、「文明社会」に同化させる一種の儀式として描かれている。靴を履く生活は、その後も、「ぎこちない」。後者は、「イタール博士」が「外気温

に敏感になってきたから着たくなったら自ら服を着るであろう」とのことばに象徴されている。「衣服」は「文明」の象徴、それを着用する必要な感覚と意志が育つことが「文化」の象徴。事実「野性の少年」は悪戦苦闘してズボンを着用する。その様子をドアの隙間から「ゲラン婦人」と「イタール博士」が覗いている。非常に印象的である。

## 2.

恐らくこれはリアリズムに関わる問題なのだろう。トリュフォー監督の「野性の少年」で描かれた「ヴィクトール」の野生生活（野性）を振り返ってみた。冒頭シーンとエンディングシーンに野生生活が描かれている。冒頭シーンは人間社会（文明）とまったく接触していない野性、エンディングシーンは人間社会（文明）によって「文明化」がはかられた後の野性。両者の野性には、当然のことながら、幾ばくかの差異がある。今はその差異について問題にするのではなく、両者に共通する－と言っていいだろう－野性である。

大きく両手を上げ、水に顔をつけながら、水面をばしゃばしゃと打つシーンが印象に残っている。トリュフォーは、これに何を象徴させようとしたのだろうか。映画では「ヴィクトール」が水を好んで飲む少年として描かれている。水を飲む喜びを表現したのだろうか。それはそれで納得できなくはない。しかしそれだけの意味なのだろうか。

映画では描かれていないが、イタールが「アヴェロン未開少年」への教育訓練を開始して2か月ほど経った頃、彼はアヴェロン県知事に問い合わせの手紙を出している。「この若者が捕縛されたのは、彼を森の中で初めて発見した時だったのか？捕縛したのはどのような手段が使われたのか？彼を留置した最初の頃、彼の振る舞い、性格、好みの食事、感覚機能、睡眠時間、身体外観はどのようであったか？食糧の確保や雨露をしのぎ寝る所の確保はどのようにしていたのか？この寝る場所はまったく人が住まず、危険な動物がいないところか？回りの地域で、この孤児が放棄された原因と放棄した人について、誰か知っている人はいるのか？」という内容である。知事の回答を読んでいると、トリュフォーが描いたのとアウトラインはほぼ同様であることに気付かされる。その中で幾つかをピックアップしてみたい。リアリズムに通じるのではないかと思うからである。

「アヴェロン未開少年」はドングリ、クリなど森の木の実の他、森周辺の畑のジャガイモ、野菜を食べていた。映画では「野性の少年」が婦人の採取したキノコをむさぶり食うシーンがある。これは、「アヴェロン未開少年」はジャガイモ、野菜泥棒だったのであるから、人手にかかった食料を「略奪」していたことを形象化したのであろう。

「野性の少年」が猟師に追われ草で隠された穴に逃げ込む場面が描かれている。当然その穴は、日常、彼が身を隠して危険から守る所、すなわち「寝所」である。「アヴェロンの

未開少年」は木枝で小屋のようなものを作りそこで眠りについていた。映画の草むらの穴は木枝の小屋を形象化している。ちなみに、「アヴェロンの未開少年」が「発見」された森にはオオカミのような獰猛な動物はいないと知事の回答にはある。しかし、その一方で、地元の人々の噂には「食ってしまいかねない獰猛な動物との遭遇を巧妙に避けることができる」というのがあったと、ボナテールは報告書に認めている。木枝で作った簡単な小屋で夜を過ごしたという事実に、知事の回答書の真実性が認められよう。そしてトリュフォーは、「野性の少年」の自然環境が比較的穏やかであったことを、示している。ただし、史実通り、「野性の少年」は何よりも人間と出会うことを恐れていた。

「野性の少年」は苦もなく木に登り、広げた両手で水面を打ちながら水を飲む。「アヴェロンの未開少年」がラコーンの森で「発見」されて以来、人々は我こそ彼を捕まえるのだと、探索に行った。それらの人々の中で、「リスのように木に登る、確かに私は見たのだ」とか、「いや、魚のように水を泳ぐ、これは私がしっかりとこの目に収めた光景だ」とか、語る者がいた。そしてそれが人々の噂となって広範に語り伝えられた。こうして「アヴェロンの未開少年」は *la bête* に仕立て上げられていくのである。「野性の少年」が猟犬に追われてスルスルと木に登っていく様、水辺での様を描いているのは、これらの噂話を形象化したのであろうか。付け加えれば、猟犬を素手で倒してしまう、猟犬が彼を恐れるなども *la bête* 化された「アヴェロンの未開少年」話を採り入れたのだろう。

猟師によって捕らえられ女主の民家の野良小屋の中に収容されていた「野性の少年」が脱走を図り、再び捕らえられる場面がある。これは史実の幾つかを束ねて形象化したものである。我も我もと「アヴェロンの未開少年」を捕らえることを試み、何人かは実際に捕らえたには捕らえたがすぐに脱走されてしまう。3人の猟師による捕縛はそうした流れの一つである。この時捕縛された「アヴェロンの未開少年」はある寡婦に身柄を預けられるが8日間そこにただけで、またもや脱走した。今度は森ではなく、山岳地帯の小さな部落や村近辺を6ヶ月間放浪した。その放浪の後、ある民家に自らが入り込む。その後アヴェロン県の首都ロゼーズに身柄が送られ、救済院に収容され、ボナテール等の専門家の手で詳細な観察が為された後、パリに移送されることになる。8日間留まった所では衣服が着せられ、火を通したジャガイモ、煮込んだインゲン豆、パン、スープ、肉なども供され、口にできるようになったという。ただし、非常に攻撃的で、意にそぐわないことに対しては嘔みついて抵抗している。6か月の放浪の後再び捕縛された彼はボロボロになったワイシャツを身につけていた。

断片を見ただけであるがそれでも、トリュフォーは、この映画を作成するに当たり、かなりの史資料に目を通していることを知ることができる。そして、それらの寄せ木細工で

はなく集成化するというリアリズム手法で、我々に「野性」性を視覚提供してくれているのである。改めて、トリュフォーのリアリズムに脱帽した次第。

ところで、改めて「ヴィクトール」の野性を見直してみると、本当に彼は、当時ピネルが言い、後の研究者もそうだとほぼ断定した「白痴」であったのだろうか？という疑問が沸いてくる。<sup>4</sup> Eugène Sue, *Les Mystères de Paris*, にはピセートル養老院（救済院）に収容されている「白痴」が次のように描かれている。邦訳本にも小倉孝誠著『パリの秘密』にも収録されていない叙述箇所である。

「精神病者の生活に覚えた陰鬱さにもかかわらず、ジェオルジュ夫人は、やや経って、不治の白痴者が閉じこめられている鉄格子のはまった庭の前を通り過ぎることになった。まさに動物の本性でさえ持たない哀れな存在、たいていは彼らの生まれについては知られていない。あらゆることを、そして彼ら自身を知らず、こうして、彼らは、まさに精神の、感情の異邦人として、生涯を送る。まったく能力のない動物的な欲求を覚えるだけだ……。極度に汚く、劣悪な家での、悲惨さと放蕩との忌まわしい交わりが、概して、貧困階層に蔓延するこの種のすさまじい墮落の起因である……。概して精神病者の容貌をただ見るだけの上辺だけの観察者には狂気がまったく分からないとしても、白痴の生理学的な特徴を見分けることは極めて簡単である。エルバン博士はジェオルジュ夫人に、粗野な白痴状態、愚鈍な無感覚あるいは痴愚の茫然自失の表情に気付かせようとはしなかった。そうした哀れな人々の顔立ちには、同時に、恐ろしくかつ不愉快な音声表現が示される。ほとんどの者が大変汚い長丈のぼろぼろの服を着ていた。というのも、可能な限りの監視にもかかわらず、本性や理性がまったく奪われたこれらの人々が、一日を過ごす庭<sup>4</sup>の泥の中に、動物のように寝転がって衣類を引き裂いたり汚したりするのを妨げることはできないのだ。

白痴たちを収容する納屋の暗がりの隅に、洞窟の動物のように、丸まって、ひとかたまりになって、しゃがみ込んでいた一人の白痴が、内にこもった連続的なゼイゼイとい

---

<sup>4</sup> (原著による注) そう言えば、衛生的な清潔さの研究を計画した慈善的な知性に対して、非常な驚きなしで見ることが不可能である。白痴者に備えられた共同寝室とベッド。かつてこれらの哀れな人たちが悪臭を放つ麦藁の中で埋まっていたこと、そして今ではそれは、本当に素晴らしい手段によって申し分のない衛生状態に保たれた、素晴らしいベッドであるということを考えれば、もう一度、悲惨な状態の緩和に身を捧げる人々を賞賛せずにはおられない。動物がその主人に対する感謝と同じではない感謝が期待されるはずだ。ただただ人間性という聖なる名の善行によってなされている。立派で、偉大だとしか言いようがない。ピセートルの管理者と医師をどれだけ賞賛してもしすぎることはない。さらに際だつのは、そうしたことを支えているのが、かのフェリュ博士の高度で公平な権威である。彼は、精神病者救済院の全体的な監督の任にある。彼のおかげで、素晴らしい**精神病者に関する法**を得た。学問的かつ深い観察に基づく法である。



うような声を口にした。さらに、立ったまま、動かず、黙ったまま、壁にもたれかかった白痴がじっと太陽を見つめていた。また、奇形なまでに太った一人の老人が木の椅子に座って、動物がががつ食べるように、横目で、怒ったような目線をあちこちに投げながら、救済院から提供された食事を貪っていた。また、自分で境界を作ってその小さな空間をぐるぐると急ぎ足で歩く者もいる。この奇妙な行為はまったく中断されることはない。彼らは、上半身を前後に揺さぶって、まるで地震のために絶えず揺れているようだ。そのめまいを誘うような単調な動きをやめることはない。大きな笑い声を上げながらである。その笑い声はきいきいという、喉から出されるしゃがれ声であり、白痴の特徴である。完全に自失状態にある人たちは食事の時にしか目を開けず、気力なく、死んだような、おしの、つんぼの、めくらの、声一つなく、生命力を伝えるしぶり一つない・・・。

言葉や知性のコミュニケーションが完全に欠落するのは白痴者の集まりの非常に陰鬱な特徴である。少なくとも、彼らの言葉と彼らの感情の支離滅裂さにもかかわらず、狂人たちは話し合い、認め合い、探しあう。しかし、白痴者たちの間では、愚鈍な無関心、非社交的な孤立が支配している・・・。誰もはっきりとした発音で決して話をせず、幾人かは未開人のような笑いをし、あるいはまったく人間でないうめき声や叫び声を挙げるときがある・・・ほとんどが彼らの監視人の存在を認識していない・・・。だけれども、驚きをもって繰り返して言うが、これらの不幸な人たちは、知的能力を完全に失っているために、もはや我々と同類にも属さず、それかと言って動物種に属さないようにさえ思われる。癒しがたいほどに病に襲われたこれらの人々は、生物よりももっと無気力な人間としてあり、(以下略)<sup>5)</sup>

シュアの描く白痴者にはトリュフォーの「野性の少年」のような「野性」性はまったく見られない。つまり、ここではっきりとすることは、トリュフォーは「野性」性を主題として描いたということである。その「野性」性こそ、ヒトが人であるためのコアなのであ

---

<sup>5)</sup> ジョージ・サムナーは1876年に発表した論文の中で、白痴者の状況を次のように描いている。ウージェーヌ・シュアの描くところとほとんど変わらないことに気づかされる。

「この6ヶ月(1846年の8月以来)、セガン氏、ヴァサン氏、ヴァレ氏の指導の下で、たくさんの年少白痴児たちが示す進歩を、私は興味深く見守ってきた。その白痴児たちは、少し前までは、人間とのコミュニケーションからまったく隔絶され、吐気と嫌悪を催す対象でしかなかった。そして、その多くは衣服をまとわず、真っ直ぐに立つことができない者がいるかと思うと、部屋の隅にうずくまっている者、哀れな声によってのみ生きていることを確認できる者もいる、という状態であった。また、白痴児たちの言語器官は発達しておらず、多くが手当たり次第に物をガツガツと口にして、豚に与える残飯や自らの糞便を食していた。その有り様は、見放された不幸な者たちという他なかった。」J.W.トレント jr 著清水貞夫・茂木俊彦・中村満紀男監訳『「精神薄弱」の誕生と変貌(上)ーアメリカにおける精神遅滞の歴史ー』(学苑社、1997年)より再引用(84頁)。

る。「文明」はその「野性」を「未開」として捉えあたかも相いれないかの如く、「野性」性を時には消滅させることを試み、時には「文明」という上薬を塗ることで覆い隠そうとしてきた。

イタールは「未開」性を、「白痴」性と「野性」性との間を揺らぐ理解をしている。そして「文明」化への道の遠いことをたびたび嘆くのである。

「数奇な運命によって、正真正銘の白痴としてどこかの救済院に送りこまれるのか、それとも、前代未聞の苦労を代償に、それでも自分の幸福には無益な、わずかばかりの教育を獲得するのか、という悲惨な瀬戸際に追い込まれるかもしれないこの不幸な人間を、苦渋に満ちた目で見つめながら、私は彼に語りかけました。

『かわいそうに。私の苦労も水の泡となってしまう、お前の努力も実を結ばなかったのだから、お前の森に戻り、また未開生活を味わいなさい。それとも、新しい欲求が芽生えて社会から離れられないというのなら、社会の役立たずという不幸を贖うがよい。そして、ビセートルに行って、悲惨と苦痛の中で死ぬがよい。』(『第2報告書』1806年。トリュフォー「野性の少年」に使用されたオリジナル・テキスト)

イタールが「野性」性の持つ「ヒトを人にする」意味を十分に理解しうる文化論的学者であったならば、すなわち、「蟹は甲羅にあわせて穴を掘る」という「生活」観を、誰よりもいち早く、開拓したことであろう。時を同じくして、スイスの教育者 J. H. ペスタロッチが「人間のあらゆる生活は、必要、要求、関係を源泉として構成される」と、教育実践における幾多の苦渋の果てに到達していたのである。トリュフォーの「野性の少年」はこういう視点から捉え直されることができるのである。